

祝 ゆたあ〜と新聞50号 特別記念号

50号記念 『100号にむけての 未来予想図』

「ゆたあ〜と」が50号を迎えました。
私が小国に赴任して、前院長の坂本先生に頼んで広報委員会を立ち上げていただいたのが、平成25年。かれこれ10年近くも、この新聞の発行を継続できているのは、この紙面作りを担ってきた広報委員会のメンバーの努力の賜物でもあります。

50号を記念して、これから100号に向けての小国公立病院の未来予想をしてみようという企画の特別号を発行する事になりました。
題して…
『ゆたあ〜と100号に向けての未来予想図』
お楽しみください。

広報委員長 片岡 恵一郎

次世代に繋ぐための10年 ～自らのウェルビーイングの為に～ 小国公立病院 病院事業管理者 片岡恵一郎

私が病院グループの管理者となって、1年が経過いたしました。グループ管理者として、組合長・副組合長・病院長と相談しながら、病院と老健と訪問看護ステーションの事業の方向性を決めていくという責務があり、すなわち、小国郷の地域医療と地域ケアの未来図を描く責任があると思うと、毎日が身の引き締まる思いです(体重はなぜか増えました…)

60歳で役職退職することを目標にすると、残された時間はあと8年。猶予はありません。現在机の上にとっちらかっている、課題を1つずつ片付けていだけで、優に20年以上休みなしで働き続けられる程のボリュームがありそうです。

私の最も重要な役割は、現在の小国郷の地域医療と地域ケアを、20年先を見据えたものに方向を定め、帆をあげ風を送り、10年後に次の世代に繋ぐということです。

私が赴任した10年前と現在の社会情勢は大きく異なっています。多くの災害がおき、新型コロナに翻弄され、大変な戦争が起こっています。それと関連してか、人類の特徴である「知」と「コミュニティ」の大部分がオンライン上に急速に移りつつあります。

公立病院を受診される患者さんの年齢層も年々変化しており、地域医療や地域ケアで担うべき内容も、担うべき地域住民(専門職に限らず)の顔ぶれも変わってきました。

20年後、私は70代前半で、知的にも体力的にも現在の半分ぐらい

のパフォーマンスに落ちており、おそらく現役の医師は引退しているはずですが、何らかの形で、90-110歳の方々の地域ケアの中心を担っているはずで

す。これは、私達、団塊ジュニア世代に与えられた大きな役割になり、次世代に医療・ケアをつなぐ為の必要条件だと考えています。この役割を果たす為には、知力・体力が衰えても、「何らかの支え」を使い、他者貢献ができる仕組みを作らなければなりません。

「何らかの支え」とは、AIやロボットかもしれませんし、オンラインのコミュニティかもしれませんし、現在はまだ発明されていない何かかもしれません。

この新しい医療・ケアシステムを世界で最も早い時期に作り上げる必要があるのが、少子高齢化はかなり進んでいますが、まだ自力の残っている地方であり、小国郷はその最先端を走れるだけの土地と人のポテンシャルがあると信じています。

これから10年間のキーワードとして、ウェルビーイング、持続可能性(サステナブル)、多様性、包摂性(インクルージョン)、北里柴三郎先生、予防医学、メディカルアート、民藝的医療、全世代型ケア、相互ケア、再配分、デジタルトランスフォーメーションなどが、頭にフワフワと浮かんできます。これらのものは、既に小国郷が潜在能力として持っているもので、これから10年間で、きっときれいな花を咲かせていくものと思いますし、その花を愛でる事が、持続可能な未来につながる重要な鍵になるはずで



この大切な時期にこの土地のこの病院グループの管理者をさせて頂ける事に誇りと感謝をもって、これからの10年に望みたいと思います。それが私自身のウェルビーイングそのものです。今後ともよろしく願いいたします。

小国公立病院の『これから』 事務局 玉飼博之

ICTの普及やAI進歩の影響で、様々なことに革新が起きています。今後の小国郷はどのように革新していくのでしょうか？

最近の病院では、受付や会計等が自動化され、診察や検査、リハビリ等の時にのみ人に触れ合うように段々なっています。様々な業務にAI等が使用され、利便性や効率性が上がってきますが、人と人のふれあいや小国郷らしさが失われていく可能性があります。

地域の皆様に支えていただき、成り立っている小国公立病院としては今後、小国郷らしさを限りなく残し、地域の方々がこの地域で長く健康で生活できるように、地域に貢献していく責務があります。

また、おぐに老健施設では地域の皆さんの生活に溶け込む老人保健施設として、医療・介護提供施設等と更なる連携を行っています。AIに置き換えることの出来ない仕事、AIが発達してもなくなる仕事として、「介護職」が挙げられています。

おぐに老人保健施設の介護職員は、全員「介護福祉士」という国家資格を持った専門家です。また、ご自宅に帰る準備をしっかりする所として、リハビリテーションを提供する理学療法士や作業療法士などのセラピストや経験の多い看護師がいます。

2019年に病院再編の新聞記事等で病院の存続について、皆さんにご心配をおかけいたしました。4/27の熊日にも掲載されておりましたように病院間の役割分担、連携強化を促進し、地域ぐるみで医療体制を維持していく方法を実行しています。

更に地域の医療機関をはじめ、介護提供施設等との連携を強化し、地域の皆様のために取り組んでまいります。これまで以上に皆様のお声を大切にし、「小国郷にない困る医療機関・介護老人保健施設」となるよう職員一丸となって頑張っていきますので、今後とも皆様のご指導、よろしく願いいたします。

看護部の「未来予想図」 総看護師長 河津紀子

日本は少子高齢、人口減少社会を迎え、2025年までに「地域包括ケアシステム」の構築を！、という号令がかかり、かなりの年月が経ちました。その中で、病院のあり方も地域医療のあり方も変化しています。

看護部は「おもしろい心遣いを持ち、親切で行き届いた看護を行う」という理念を掲げ、子供から高齢者まですべての人々が健康で安心して暮らすことができる地域づくりに貢献したいと考えております。

そのためには、医療・ケアを、他人事ではなく我が事として考えられる地域となるのが目標で、病院を飛び出して、地域でも活用されるような看護師を多く教育して、地域へ貢献していきたいと考えております。

まずは、多岐にわたる病院看護業務とともに、訪問看護や入院支援、介護領域にも力を入れ、「看護実践力のある人材を育成し、地域らしい看護を提供する事を近々の目標にします。また、住み慣れた地域で、自分らしい生活が出来るように住民を支援し、入院から在宅まで切れ目のない医療・看護を提供していきたいと思っています。

しかし、相変わらず看護師は不足しており、人的資源は限られています。ターゲットの集中と効率化が必要になります。業務の見直しや勤務環境設備など、働き方を改善し、いかに働きやすく、働き続けられる職場にするか、を日々考えながら管理業務にあたっております。

今後とも地域住民の皆様信頼されるように地域看護の提供を、看護部全員で取り組んでいきたいと思



老人保健施設の『これから』

おぐに老人保健施設
看護師長 小田栄美

高齢化社会が進み、地域医療のあり方も変化しているように、介護の場も同じく変化しなくてはなりません。

国は介護老健保健施設がもつ在宅支援機能には、「入所サービス」「短期入所療養介護」「通所リハビリテーション」、当施設では実施していませんが、「訪問リハビリテーション」があります。また、利用者やご家族の希望があれば「看取り」も支援のひとつとなり、「在宅復帰」だけでなく「在宅支援」の拠点となる施設であることを掲げています。

リハビリテーション等を提供し、在宅支援・在宅復帰のための施設が介護老人保健施設であり、利用者を中心に、様々な専門知識・技術を持ったスタッフが、職種の垣根を越えて、チームで連携をとり、利用者本人やそのご家族が希望される生活環境に寄り添い、充実した在宅生活を続け、安心して人生の最終段階を迎える日まで、支援できるサービスを一緒に考え、提供していきたいと思

ゆたあ〜と

発行
小国公立病院
0967-46-3111
おぐに老人保健施設
0967-46-6111
訪問看護ステーション
0967-46-6050

50号
令和 4年 5月

小国公立病院
HPアドレス
<http://www.ogunihp.or.jp>
/bind/

訪問看護の『野望』

訪問看護 大塚ゆかり看護師

どんな病気、障害があっても「家に帰りたい、家族と過ごしたい」御利用者の希望に沿うため訪問看護を利用していただいています。しかし看護師だけで対応しているわけではありません。

いわゆる多職種の人たちと、もちろん御利用者家族と一緒に在宅生活が過ごせるようにお手伝いをしていきます。

ひとりひとりに合った対応方法いわゆるケアを、御本人たちを含め、みんなで考えていく所にやりがいと難しさがあると思っています。

利用者の人生の最終段階のお付き合いになることがほとんどで、関わっていかなくて正解は一つではなく、全てが正解と思いついていきたいと思います。



検査科の『未来予想図』

検査科主任 有住臨床検査技師

検査科では3名の臨床検査技師が在籍しております。この3名で、直接的な検査や、緊急及び地域への医療体制に対して、私たちが出来る事を可能な限り行ってきました。

しかしながら、まだまだ本来あるべき臨床検査技師として役目を果たせていないのが現状です。その役目を果たす為には、限りある組織資源である、人・物・金、を有効に活用しなければなりません。

そして臨床検査技師としての枠を超えて、小国郷の医療への責務を全うする。そのためには検査科単独では何もできません。他部署と連携を図り、私どもが考える理想と、住民の皆様が考えるニーズを満たしていくことが、理想的なビジョンと考えております。



放射線科の『これからのビジョン』

放射線科主任 岩屋正人放射線技師

ビジョンを考えるにあたり、筆者は放射線室の窓越しから小国杉の山林を眺めている。

小国町・南小国町 両町の町木は、奇しくも同じ「杉(スギ)」。

花木詞は『堅実』『雄大』そして『あなたを守る』

…ビジョンはこれで決まり。～放射線科もかくありたい～

今年度より、3人体制での運営が再スタートします。

3人体制になった事を最大限に活用し、利用者様の利便性向上のため以下のビジョンを掲げます。

・短期的ビジョン

診療放射線技師3人での業務運営を、スムーズに遂行できるようスタッフ間の連携・相互教育に努めます。これにより予約枠拡大などの時間的効果や撮影業務の安全性・スループット向上など物理的効果も望めることになります。

・中・長期的ビジョン

当院の多岐にわたる撮影・検査業務の専門性を高め、質の確保に努めます。スタッフ個々の質、専門性を高めるため、積極的に研修・認定制度に参画します。

これら短期、中期、長期ビジョンが目指すところは、利用者様への質的・量的サービスの向上にあり、さらに切れ目なく継続的に提供できるところにあります。

これからも小国杉が年輪を重ねる如く、小国郷の医療・福祉の一翼を担える用成長していきたい。



薬局の『未来予想図』

薬剤科主任 宮崎里美薬剤師

超高齢化に進む小国郷では医療の連携がすべてIT環境で繋がっている。一人暮らしの世帯が半分以上を占め、訪問診療が主体となる。

地域の薬剤師は病院薬剤師・調剤薬局の薬剤師の垣根を越え、地域密着で繋がっている。薬剤師は薬局の中の仕事から外の仕事が増え、住民の方の自宅に訪問し、残薬の把握、服薬状況の確認、副作用の有無などを含めた生活全般の相談を行う。

情報は一元管理され便利になった社会の中においても、人と人との交流を大切に一人一人の人生に向き合い、積極的に主治医に処方提案を行うなど連携の中核を担う存在となる。

また、積極的に薬の情報を地域住民の方に発信し、地域の方から顔の見える薬剤師を目指したい。いつでもお気軽にご相談下さい。



小国公立病院グループ

リハビリテーション科の目指すところ

リハビリテーション科長 片岡恵一郎

リハビリテーションの語源は、re(再び、戻す)と、habilis(適した、ふさわしい)です。つまり、単なる機能回復ではなく「人間らしく生きる権利の回復」や「自分らしく生きること」が重要で、そのために行われる活動がリハビリテーションであるといえます。



少子高齢化社会では、リハビリテーションは生活を支える必須の要素であり、病院でも老健でもリハビリが、医療・介護サービスの中心となっている利用者さんはとても多くいらっしゃいます。対象は人だけではなく、住まい等の生活環境も整える事も多く、幅広いアプローチで生活を支えていきます。

現在は、病院でのリハビリは、治療と並行して提供される、急性期で失った機能回復と安静による寝たきり予防が中心、老健でのリハビリは、機能の維持・向上をはかり、生活を支える事が中心になっています。

医療保険・介護保険の違いはあるのですが、利用者さんが自分らしく生活することを支援するという意味では、根本理念は同じであり、今後は病院と老健のリハビリがシームレスにつながっていく事が、地域医療・地域ケアで重要になってきます。そして、この連携が密にできる事が、当グループのリハビリテーション科の強みであるとも言えます。

小国公立病院グループのリハビリテーション科は、他部署より平均年齢が若いのも特徴です。多様な世代の多様な経験と得意分野を生かす為、病院と老健のリハビリテーションの合同カンファレンスを行い、次世代を担う後進をしっかり育成し、ベテラン勢と共に切磋琢磨していきたいと考えています。

また、病院・老健スタッフ間で知識・技量・利用者情報・人的資源の共有を行い、医療と介護の垣根がなくなる様なリハビリテーション科運営に努めたいと思います。

今後、小国郷で目指すところは、人だけでなく地域の生活全体を対象とした、地域リハビリテーションです。機能を失った高齢者が増えていく地域では、セラピストの力だけではリハビリテーションの提供量が不足していきます。専門職を含めた地域の住民全体で、小国郷らしいリハビリテーションを提供できる地域を作っていける様、リハビリスタッフ一同日々精進して参ります。



栄養科の『未来予想図』

栄養科主任 小野葉子管理栄養士

私たちの身体は食べ物で作られています。栄養を摂り、排泄して生命を営んでいます。食物は即効性のない薬であり、毒でもあります。

健康の3本柱の1本である「栄養」は、何をどの位食べれば良いかを、自分で考えて、選んで食べることが出来るようになることが理想です。

しかし、退院後の栄養管理の不安や、在宅でのサポートが必要な方もいらっしゃいます。これらをサポートするには、外来や入院時の栄養指導、おぐに老人保健施設の利用(入所、ショートステイや通所)、そして在宅訪問による栄養ケアなどが必要となってきます。

しかし残念なことに現状は、マンパワー不足でその流れができていません。

栄養科の業務体制を検討し、スタッフ間の情報共有と管理、また訪問栄養食事指導や情報発信、行政とも連携を図りながら、小国郷の皆様「栄養」の面からサポート出来ればと考えています。

新聞を作成するときには、職員の皆さんが、忙しい業務の中、無理難題を受入れて頂き、届けてくれた原稿を大事に大事に編集し、皆様にお届けさせて頂いています。

新緑の時期になり、青空と雲と新緑のコントラスト、雨にしっかりと濡れた新緑も楽しめる季節となりました。

ある日、細かい作業の編集の中に、暇がピクピクすることを委員会メンバーに伝えると、きつと、目が喜んでるんだよといわれ…(汗)

でも確かに!!!ものは考えようだ!新聞を手にとって読んで頂いている姿を思い出せば、目の痙攣なんて!!と再び奮起、の繰り返し。

気づけば8年たちました。

4月から委員会のメンバーも変わりました。今までとまた違った情報がお伝えできればと思っています。

これからもよろしくお願致します。

新聞チーム編集担当 渡邊あゆみ